

魚類学雑誌 別冊

22 卷 1 号 : 49-52, fig. 1.

1975 年 8 月 20 日

ヒナハゼの学名について

明仁 親王・目黒 勝介

On a Goby *Redigobius bikolanus*

Prince Akihito and Katsusuke Meguro

ヒナハゼの学名について

明仁親王・目黒 勝介

On a Goby *Redigobius bikolanus*

Prince Akihito and Katsusuke Meguro
(Received October 5, 1974)

Tomiyama (1963: 70) recorded two small gobiid specimens from Yakushima and Okinawa jima, Japan, identified them as *Gobius tessellata* (Herre) and proposed Japanese name "hinahaze". Our examination of the two specimens revealed that they are different from the original description and figure of *Vaimosa tessellata* Herre, but agree well with the original description and figure of *Vaimosa bikolana* Herre and *Vaimosa montalbani* Herre and the types of *Stigmatogobius minutus* Takagi. *V. montalbani* and *S. minutus* are considered as junior synonyms of *V. bikolana*. It was made clear that the genus *Redigobius* Herre is most appropriate among the generic names adopted for *V. bikolana*, on the basis of comparison of respective type species.

(The Crown Prince's Palace, Minato-ku, Tokyo, 107, Japan)

Tomiyama (1936: 70) は、屋久島と沖繩島で採集された2個体 (ZIUT 30908, 16925) の小型のハゼを *Gobius tessellata* (Herre) と同定し、これにヒナハゼの和名を付けた。このたびこれら2個体の標本を調べたところ *G. tessellata* とは異なり、ビコールヒナハゼ *Gobius bikolana* (Herre) (青柳, 1957: 226) あるいはイチマツハゼ *Stigmatogobius minutus* Takagi と呼ばれているものであることが明らかになった。検討の結果、学名は *Redigobius bikolanus* (Herre) とすべきであるとの結論

に達したので、ここに報告する。

Redigobius bikolanus (Herre) (Fig. 1)

ヒナハゼ

Vaimosa bikolana Herre, 1927: 151, pl. 11, figs. 2

Vaimosa montalbani Herre, 1936: 359, pl. 1, fig. 3

Gobius tessellata (Herre) Tomiyama, 1936: 70 ヒナハゼ

Pseudogobius bikolanus (Herre) Aurich, 1938: 161

Gobius bikolana (Herre) Aoyagi, 1948: 14 ビコール

ヒナハゼ

Stigmatogobius minutus Takagi, 1957: 114, fig. 5, pl.

6E イチマツハゼ

Redigobius bikolanus (Herre) Inger and Chin, 1962: 184

材 料

用いた材料の採集地、採集年月日は次の通りである。角括弧内は個体数、丸括弧内は標準体長 (mm) を示す。

Redigobius bikolanus ヒナハゼ: ZIUT (Zoological Institute, Faculty of Science, the University of Tokyo) 30908, 鹿児島県熊毛郡 (屋久島) 宮ノ浦, VI: 12: 1921 [1] (27); ZIUT 16925, 沖縄県 (沖縄島) 今帰仁村運天, [1] (25); 黒田長礼博士所蔵標本 K 804, 静岡県沼津市島郷川, X: 12: 1946 [1] (22); 同上, XI: 1: 1964 [1] (17); LFBTUF (Laboratory of Fishery Biology, Tokyo University of Fisheries) 38, holotype of *Stigmatogobius minutus* Takagi, 鹿児島県薩摩半島泊 (川口), VI: 1: 1949 [1] (26); LFBTUF 40, paratypes of *S. minutus*, 宮崎県一ツ葉入江, XII: 18: 1952 [8] (18~21); LICPP (Laboratory of Ichthyology, The Crown Prince's Palace

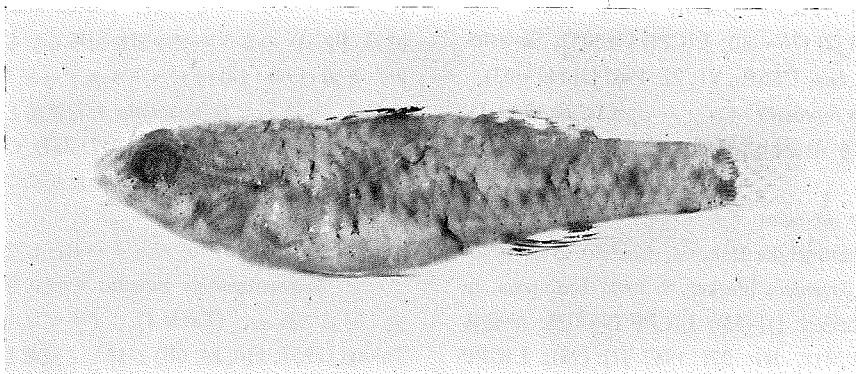


Fig. 1. *Redigobius bikolanus* (Herre), specimen (ZIUT 30908, 27 mm in standard length) from Yakushima, Kagoshima Pref., Japan.

Table 1. Counts and measurements of *Redigobius bikolanus*. Numerals in parentheses indicate number of specimens examined.

	ZIUT 16925, 30908 two specimens identified as <i>Gobius tessellata</i> by Tomiyama (1936)	LFBTUF 38 holotype of <i>Stigmatogobius minutus</i>	LFBTUF 40 eight paratypes of <i>Stigmatogobius minutus</i>	LICPP (thirty specimens listed in material list)
Total length (mm)	31~33	32	22~28	20~50
Standard length (mm)	25~27	26	18~21	16~41
Dorsal fin rays	VI-I, 7	VI-I, 6	VI-I, 7	VI-I, 7
Anal fin rays	I, 6	I, 6	I, 6	I, 6 (29), I, 7 (1)
Pectoral fin rays	16~17	17	16 (6), 17 (2)	15 (3), 16 (12), 17 (15)
Scales in a longitudinal series	27	26	26	26 (11), 27 (18), 28 (1)
Scales in a transvers series	7	7	7	7
Predorsal scales	7 (1)	7	7	6 (2), 7 (26), 8 (2)

Tokyo) 1952202, 同上 [3] (16~18); LICPP 1964072, 沖縄県(石垣島)宮良川, III: 1964 [1] (29); LICPP 1965011, 長崎県長崎市鹿尾川河口, V: 30: 1965 [3] (23~38); LICPP 1967036, 鹿児島県大島郡(徳之島)徳之島町母間川河口, IX: 26: 1967 [1] (21); LICPP 1967061, 沖縄県(石垣島)名蔵川河口, III: 27: 1967 [1] (26); LICPP 1967069, 同上(西表島)大富, III: 20: 1967 [1] (23); LICPP 1968235, 同上(久米島)銭田, 山城の中間, III: 19: 1968 [1] (23); LICPP 1968270, 同上(石垣島)名蔵の小川, X: 12: 1968 [1] (19); LICPP 1968275, 同上(石垣島)宮良川, X:, 10: 1967 [4] (16~20); LICPP 1968282 同上(沖縄島)嘉手納, III: 26: 1968 [1] (25); LICPP 1971105, 和歌山県西牟婁郡白浜町富田, 富田川上流 2 km, XI: 9: 1971 [3] (26~38); LICPP 1971107, 同上, [1] (41); LICPP 1972091, 鹿児島県熊毛郡(屋久島)上尾久町木府川河口, XI: 13: 1972 [3] (19~23); LICPP 1972092, 同上(屋久島)志戸子川河口, XI: 12: 1972 [2] (19~24); LICPP 1972139, 同上名瀬市(奄美大島)知名瀬川河口 1 km, VII: 6: 1972 [2] (26~27).

Gobius niger: LICPP 196007, Sulina, Black Sea, Rumania, 1960 [2] (76~80); LICPP 1965052, Sevastopol Bay, Black Sea, USSR, VI: 22: 1965 [3] (49~63).

Mugilogobius fontinalis イズミハゼ: LICPP 1966033, 沖縄県(沖縄島)美里村字泡瀬, III: 15: 1966 [5] (26~34).

Pseudogobius javanius スナゴハゼ: RMNH (Rijksmuseum van Natuurlijke Historie, Leiden) 4549, holotype of *Gobius javanicus* Bleeker, S. Java, Indonesia, in collection of Bleeker, [1] (33); LICPP 1967078, 沖縄県(石垣島)名蔵川河口, III: 27: 1967 [1] (28); LICPP 1972204, 同上(石垣島)名蔵, VII: 28: 1972 [4] (32~33).

Stigmatogobius sadanundio: LICPP 1965047, Nibong

River, Malacca, Malaysia, II: 13: 1965 [5] (44~48).

考 察

Tomiyama (1936: 70) によりヒナハゼと名付けられた標本が *Vaimosa tessellata* の原記載および図 (Herre, 1927: 153, pl. 12, fig. 1) と異なる点は, Table 1 に示したように第2背鰭が1軟条多いこと, 臀鰭から尾柄正中線上に連なる4暗色斑があることである. 後に富山 (1965: 364) はヒナハゼの学名を *Gobius javanicus* に改めたが, その際の記載と図は Herre (1927: 153, pl. 12, fig. 1) の *V. tessellata* から引用したもので, *G. javanicus* の模式標本とは異なっている.

Okada and Ikeda (1938: 82, pl. 3, fig. 3) の沖縄島産ヒナハゼ *G. tessellata* の記載と図は Tomiyama (1936: 70) の標本と一致する. 後に青柳 (1957: 226, fig. 188) はビコールヒナハゼ *Vaimosa bikolana* とヒナハゼ *V. tessellata* を区別し, 沖縄島と宮崎市近傍から採集したものをビコールヒナハゼ, Tomiyama (1936: 70) により屋久島と沖縄島から報告されたものをヒナハゼとしているが, このビコールヒナハゼの図は Okada and Ikeda (1938, pl. 3, fig. 3) のヒナハゼの図を引用したものである. なお, 青柳 (1948: 14) はビコールヒナハゼ *G. bikolana* を沖縄島, ヒナハゼ *G. tessellata* を石垣島と沖縄島から記録しているが, これは青柳 (1957: 227) の採集地とは一致せず, 両者をどのように区別したかについては記していない.

Tomiyama (1936: 70) がヒナハゼとした標本はイチャマツハゼ *Stigmatogobius minutus* の模式標本と較べても全く同じであった (Table 1). イチャマツハゼについては Takagi (1957: 114, pl. 6E) が詳しく記載している*.

* 完模式標本の第2背鰭の6軟条はこのたびの調査によると例外的なものといえる (Table 1).

以上のことから和名のビコールヒナハゼとイチマツハゼはヒナハゼと同一種を指していることが明らかになった。従って最初に提唱されたヒナハゼを和名に採用するのが適当であると考えられる。前報（明仁親王，1963：9, 10）で肩胛骨の材料として用いた3種はヒナハゼ1種となる。

ヒナハゼの学名について：ヒナハゼの標本と *V. bikolana** の原記載と図（Herre, 1927: 151, pl. 11, fig. 2）を較べるとはほぼ一致するが、ヒナハゼの標本に見られた腹部の2暗色斑についての記載や図はない。Herre はフィリピンから *V. bikolana* を記載した後に、同じくフィリピンから *Vaimosa montalbani* を記載している（Herre, 1936: 359, pl. 1, fig. 3）。*V. montalbani* の記載には *V. bikolana* のことが書かれていないので、両種を Herre がどのように区別したかはわからない。この *V. montalbani* の記載と図には *V. bikolana* の記載と図に見られなかった腹部の斑紋が表わされている。Okada and Ikeda (1938: 82, pl. 3, fig. 3) のヒナハゼの図にはこの腹部の斑紋が胸鰭にかくれてわずかに描かれているが記載には何もふれられていない。Herre (1927: 151, pl. 11, fig. 2) の場合記載と図にこの斑紋が書かれていないが、Okada and Ikeda (1938: 82) の記載の例に見るように、この斑紋を重視する必要はないように思われる。以上の点から考えて、ヒナハゼを *V. bikolana* に同定することは妥当のように思われる。なお、Aurich (1938: 161) は学名を *Pseudogobius bikolanus* とし、この腹部の斑紋も記載している。

ヒナハゼの属名としては、*Vaimosa* Jordan and Seale, (模式種イヅミハゼ *Vaimosa fontinalis* Jordan and Seale), *Gobius* Linnaeus, (模式種 *Gobius niger* Linnaeus), *Pseudogobius* Popta, (模式種スナゴハゼ *Gobius javanicus* Bleeker—Aurich (1938: 58) により指定された), *Stigmatogobius* Bleeker, (模式種 *Gobius pleurostigma* Bleeker—*G. pleurostigma* は Bleeker (1878: 202) により *Gobius sadanundio* Hamilton のシノニムとされた), *Redigobius* Herre, (模式種 *Gobius sternbergi* Smith) のいずれかが用いられてきた。ヒナハゼとイヅミハゼを比較すると、イヅミハゼは、前鼻孔が長いこと（イヅミハゼは上唇上縁を越し、ヒナハゼは上唇上縁に達しない）、眼隔域が広いこと（イヅミハゼは眼径とほぼ同じ、ヒナハゼは眼径の1/3）、鱗が小さく（イヅミハゼは縦列鱗数が38~40、ヒナハゼは26~28）、後頭部鱗

が他の鱗と較べて大きくないこと（ヒナハゼは後頭部鱗が他の鱗と較べて大きい）、感覚管がないこと、無肩胛骨型か点状肩胛骨型に属すること（ヒナハゼは二叉状肩胛骨型）により区別される。*G. niger* は鱗が小さく（*G. niger* は縦列鱗数が42~43）、後頭部鱗が他の鱗と較べて大きくないこと、第2背鰭と臀鰭の軟条数が多いこと（*G. niger* は第2背鰭が11~12軟条、臀鰭が10~11軟条、ヒナハゼは第2背鰭が7軟条、臀鰭が6~7軟条）、胸鰭遊離鰭条を有すること、前眼肩胛管に単一の開孔 C* を有し、G, K', L' を有すること（ヒナハゼは前眼肩胛管と開孔 B', C (1対), D (単一), E, F, H', 前鰓蓋管に開孔 M', N, O' を有する）により区別される。スナゴハゼは、吻端が円くふくらみ、上顎にかかっていること、上顎が下顎より長いこと（ヒナハゼはほぼ同長）、前眼肩胛管に B', G, H' を欠くこと、前鰓蓋管のないこと、無肩胛骨型に属すること、下後鎖骨がないことにより区別される。*S. sadanundio* は眼隔域が広く、眼径よりも大きいこと、下顎が上顎より長いこと、前眼肩胛管に B', E, G, H' を欠き、D が1対であること、前鰓蓋管のないことにより区別される。これに対し、*Redigobius* 属の模式種 *R. sternbergi* の模式標本は Koumans (1940: 128) によると、その原記載とは異なり、第1背鰭6棘、頬部無鱗であって、*Gobius dispar* Peters との間に差異は認められないとしている。なお Herre (1927: 98) もまた、原記載の誤りを知らずに *R. sternbergi* と *Vaimosa dispar* (= *G. dispar*) との類似を指摘している。したがって *R. sternbergi* は *R. dispar* のシノニムであると考えてよいように思われる。Herre (1927: 142) の *V. dispar* の記載から見ると、頭形、特に口の大きさの明確な雌雄差、後頭部鱗の大きさ、鱗数、鰭条数がヒナハゼによく類似している。それゆえ、Inger and Chin (1962: 184) に従ってヒナハゼの学名を *Redigobius bikolanus* とするのが妥当のように思われる。そして *V. montalbani* と *S. minutus* はそのジュニアシノニムとなる。

ヒナハゼの日本での採集地については北は静岡県沼津市（黒田，1952: 172）から南は沖縄県西表島にわたっている。

謝 辞

これを書くにあたり、貴重な模式標本などを貸与して頂いた黒田長礼博士、東京水産大学教授高木和徳博士、

* 模式標本はマニラの Bureau of Science が戦焼したので存在しない。

* 感覚管開孔は前報（明仁親王，1971: fig. 1A）にしたがつて記し、感覚管端開孔はすべて、をもつて示す。

また、種々有益な助言と文献の閲読の便宜とを与えて頂いた東海区水産研究所阿部宗明博士、種々有益な助言を与えて頂いた日本ルーテル神学大学教授上野輝弥博士ならびに東宮侍従八木貞二氏、同富士亮博士に対し、深く感謝の意を表す。なお、計数值などは坂本勝一総理府技官の協力を得た。深く感謝する。

引用文献

- 明仁親王. 1963. ハゼ科魚類の肩胛骨について. 魚類学雑誌, 11 (1/2): 1~26, figs. 1~25.
- 青柳兵司. 1948. 琉球列島産淡水魚類総説. 動物学雑誌, 58 (1/2): 13~14.
- 青柳兵司. 1957. 日本列島産淡水魚類総説. 272+17+20, 大修館書店, 東京.
- Aurich, H. J. 1938. Die Gobiiden (Ordnung Gobioida). In Mitteilung 28 der Wallacea-Expedition Woltereck. Int. Rev. Ges. Hydrobiol. Hydrograph., 38: 125~183, figs. 1~28.
- Bleeker, P. 1878. Description des especes insulindiennes du genre *Stigmatogobius*. Versl. Akad. Amsterdam 2 (12): 199~208.
- Herre, A. W. 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. Bur. Sci., Manila, Monograph 23: 1~352, pls. 1~30.
- Herre, A. W. 1936. Fishes of the Crane Pacific Expedition. Field Mus. Nat. Hist., Zool. Ser., 21: 1~460, figs. 1~50.
- Inger, R. F. and P. K. Chin. 1962. The freshwater fishes of North Borneo. Fieldiana Zool., 15: 1~268.
- Koumans, F. P. 1940. Results of a reexamination of types and specimens of gobioid fishes, with notes on the fishfauna of the surroundings of Batavia. Zool. Meded., Leiden, 22: 121~210.
- 黒田長礼. 1952. 駿河湾魚類追加 (第10報). 動物学雑誌, 61 (6): 169~177, figs. 4~9.
- Okada, Y. and H. Ikeda. 1938. The Freshwater Fishes of Okinawa-zima. Trans. Biogeogr. Soc. Japan. 3 (1): 71~86, pls. 1~3.
- Popta, C. M. L. 1922. Vierte und letzte Fortsetzung der Beschreibung von neuen Fischarten der Sunda-Expedition. Zool. Meded., Leiden, 7: 27~39.
- Takagi, K. 1957. Description of some new gobioid of Japan, with a proposition on the sensory line system as a taxonomic character. J. Tokyo Univ. Fisher., 43 (1): 97~126, figs. 1~8, pls. 5~6.
- Tomiyaama, I. 1936. Gobiidae of Japan. Japan J. Zool., 7 (1): 37~112, figs. 1~44.
- 富山一郎. 1965. [ハゼ亜目], pp. 355~375. 岡田要ほか監修, 新日本動物図鑑, 下. 北隆館, 東京.

(107, 東京都港区元赤坂 東宮御所)